



金融市場と中央銀行

東洋経済新報社・本体価格三六〇〇円

藤木 裕著

中央銀行の歴史的 분석による
新生「日本銀行」の本質的機能

評者 北村行伸・慶応義塾大学客員助教授

この本の目次

- はしがき
- 第1章 イントロダクション
- 第2章 金融市場の発展と最後の貸し手としての中央銀行制度
- 第3章 プレトン・ウッズ体制下の米国金融政策と合理的期待形成理論
- 第4章 中央銀行制度の経済理論
- 第5章 中央銀行制度の定量化と経済パフォーマンスの国際比較分析
- 第6章 変動相場制下での金融政策運営スタイル
- 第7章 金融政策運営の実証的側面
- 第8章 展望
- 参考文献
- 索引

本年四月一日をもって新しい日本銀行法が施行された。それにともない、新しい総裁、副総裁、政策委員、理事が次々と任命され、政策委員会・金融政策決定会合の議事要旨のみならず、日々のオペレーションの内容についても、逐次公表されるようになってきた。

政策判断から給与水準にわたるまで日本銀行の行動が、これほど関心を持たれ、また同時に厳しい批判にさらされるようになったことは、一連の金融不祥事、銀行経営の行き詰まりなどに関係していることはいえ、新法によって、日本銀行の独立性が高められ、かつ国民に対して政策運用等について説明義務を負うということが強く認識されるようになったこととも関連しているだろう。

日本銀行法の導入や意義については、これまでも田尻嗣夫『中央銀行 危機の時代』（日本経済新聞）や山脇岳志『日本銀行の

真実』（ダイヤモンド社）などジャーナリストの手による著書はあったが、世界各国の中央銀行をめぐる経済理論と実証研究を手際よくまとめ、今回の日本銀行法改正を正當に位置づけた研究書として本書を紹介したい。歴史的存在としての中央銀行

本書の特徴は、(1)中央銀行の存在意義をその世界的な設立の経緯にまで遡り分析していること、(2)国際的な視野を通してみた中央銀行論となっていること、(3)中央銀行をめぐる現在までの主要な経済学的議論の簡便なサーベイになっていること、(4)著者自身の理論モデル、実証モデルの結果が報告されており、単なるサーベイではなく、良質な研究書になっていることなどを挙げる事ができよう。

今日、中央銀行が存在し、金融政策を行なうことに疑問を持つ人は少ないと思われるが、貿易、両替、簿記などと比べると、

その歴史はこのほか新しい。因みに、近代資本主義の発祥の地であるイギリスのイングランド銀行の設立は一六九四年である。当時、名誉革命と対仏戦争にともなう王室財政逼迫を背景に、シティの有力シンジケートが一二〇万ポンドの資金を王室に貸し付けたことを契機に、イングランド銀行に銀行券独占発行許可が与えられ、銀行の銀行としての機能するようになった。

その結果、最後の貸し手機能が意識され、その見返りとして銀行に対する監督権限が生まれ

たのである。

著者は、今日中央銀行の機能と考えられているものは、歴史的事象の積み重ね、試行錯誤を通して形成されてきたものであることを指摘している。

金融政策のあり方については、為替レート、通貨供給量、インフレーション、金利などの名目変数を目標値として、それを達成することを中央銀行の政策目標とするアプローチを紹介している。

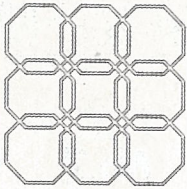
そこでは、中央銀行があるルール（ターゲット）を採用するということは、政府とのあいだにある種の最適契約を結ぶことであると解釈できるとである。最適契約と免責条項によって想定されていなかった事態が発生する場合には、不完備契約の理論を援用することが有益であると論じら

れている。

つまり、この理論からは、政策目標として事前に契約できるものと、できないものに分けて考える必要がある、契約できない最終目標に関しては、事後的な説明をするという条件付きで中央銀行の独立性を確保し、その裁量にまかせるべきであるという結論が導かれるのである。

他の制度と同様、明治維新を契機に、西欧諸国にはすでに制度として存在していた中央銀行をコピーするかたちで日本銀行を設立したわが国では、中央銀行はなぜ必要なのか、中央銀行の本質的機能はなんなのかといった問題について、これまで広く国民のあいだで論じられることは少なかつた。今回の日銀法改正と未曾有の金融再編成の流れの中で、これらの問題は常に問い直す必要がある、その際にこうした経済理論は有効な指針を与えてくれるものであることを本書は真摯に教えてくれる。

金融市場と中央銀行



著者のプロフィール
ふじき ひろし

1964年東京生まれ。京都大学経済研究所助教授。87年東京大学経済学部卒業後、日本銀行入行。93年シカゴ大学でPh.D.（経済学）取得。